

漢詩：文苑

著者	湖海子，東郭散人，咲花，滄洲
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 9
ページ	5 8 - 6 1
発行年	1901-12-24
URL	http://hdl.handle.net/2298/5259

寺の鐘聲蒼々として、夕暮を傳ふれば、黄昏の雲は油然として、白嶋の大理石の頂きより湧き茫々たる平野蒼洋として薄暗くなれり。

次

吾家に就きし時は、冷然たる十六夜の月、肥後富士の南側に現はれ、その清々しき月影は、水の如く流れ、樹下の月光緑玉の色に輝き、葉末の露は、明星の如く光れり。一庭の光景夢よりも美はしく、氷川一條の流、月夜を縫ふて涼々たり。

樓上にのぼりて、花瓶に清水を灑ぎ、彼女が眞情を籠めて贈りたる一輪の花百合を挿入すまば、たどへなき清香を放ち、さやかなる月光、花辭に落ちて、詩神の躍るを覺わぬ。

彼のユダの野に於て、神偉の子をして、神の眞理を歌はしめし百合の面影をぞる想像に浮んで、思は悠々として、轉た天の聖國を慕ふ。

斯くて嗚呼一輪の百合は、吾をして吾が全身の愛を、その人に向て、獻げざる可からしめぬ。

漢詩

櫻花歌

湖海子

昔何神兮何春。雲之來兮紛紛。乘雲兮高駝。望天地兮未分。雲忽飄兮輕舉。又鬱結兮沈澗。一抹白兮誰待。入手中兮欲薰。忽反掌兮四散。謂是華兮是櫻。惟有此兮終古。令天地兮春榮。民俱瞻兮敷衽。其華翳兮蓬瀛。日照之兮爛爛。風又吹兮氤氲。矧其華兮有實。綠葉含兮紅星。不老藥兮在此。花中人兮長生。秦求之兮不得。徐福繫兮海濱。君不可兮再

得花萬古兮。一靈萬古護兮。帝座紛蘭。凝兮。環闕。見西都兮。嵐。望南國兮。芳山。我夢落兮。千里入東京兮。問津芳霏兮。煙濤隔神之人兮。何時還。櫻花兮。如雲。

星江漁長曰。櫻花是所謂大和心者也。則我邦詩人固不可無詩焉。而予未識孰能爲白眉。今湖海用三閭之遺響。以寫大和心之名花。此大得其調劑者也。若有問其技工如何者。則余將對曰。是決非庸手之所及矣。

鯨骨杖歌

我聞橫海之長鯨。時騰上。一劍斬之。天地響。鯨背之骨。一萬六千尺。墮我前。折取爲杖。足憑仗。是誰所遺夢耶真。聽我一歌鯨骨杖。手中此杖嗟猶存。夢中有人爲我言。白衣韓客來關市。此杖得自漁家子。漁家不識何邊在。使人登高望雲海。乙未之歲。游三韓。乘風直浮破浪船。玄海黃海看洶湧。浩歌擊碎鐵欄干。絕影殘嶼鯨鯢吼。白日雷雨捲狂瀾。當時屢見長鯨背。雲海茫茫空自記。摩挲此物今問之。爲骨爲杖緣底事。湖海澄目一大笑。長鯨死後無故態。吁嗟乎男兒鬱鬱不得志。千秋奇骨橫天地。有時曝骨荒草邊。豈爲杖策人。手墜胡爲哉。眼中人不解我輩有不平。長劍倚天手不及。尙誇時時髀肉生。願以長歌相和去。擲地此物鏗然鳴。嗟哉死鯨骨杖。汝有靈。鼓浪成雷噴沫成雨載我行。

湖邨小隱曰。懸空直下。字字皆縱橫個儻。奔放險幻。成風馳雲飛之勢。極剽勁奇宕之致。讀未終篇。而心目已眈矣。

晉州旅館次壁間韻

六十

客夢濛濛繞隴頭。他鄉不似故鄉秋。平原雨碎狐吹火。古渡蘆枯鬼喚舟。笛裂殘樓亂星響。劍寒虛壁一燈幽。孤陰牢落仍蒼鬢。閱盡人間萬種愁。

湖邨小隱曰。宛然乾隆諸子口角。平原古渡一聯。足使忠雅堂乞降軍門。

寄懷星江湖海督學生遊北地

東郭散人

亂山秋色多。百里此經過。北雁臨燕屋。川名西風拂柳河。地名書生真遠志。詞客且高歌。落木南關路。看雲意若何。

湖海曰。起勢超邁。直疑風雨颯至。以下如水流石轉。隨手而成。落木五字。的是關外景象。真乃絕世高響。

懷古三律

吟花滄洲

其一 畝傍陵

一統中原乘六龍。干戈幾載拂群兇。且開荆棘靈禽導。更破波濤海若從。國是治平寬法令。民皆安堵力工農。皇基萬世猶如此。陵上年年樹色濃。

湖海曰。有如此筆。方許作畝傍陵詩。

其二 奈良

秋懷往事入城闌。風物至今猶可人。七代繁華金粉地。一丘麋鹿碧池濱。松烟和麝香家。

實。瓜、子、漬、糟、其、味、新。別有箇廬遮奈佛。千秋兀坐獨含曠。

湖海曰。出語流暢。自有才調。所謂南都墨。奈良漬奈良大佛。皆入詩中。而不落懷古常套。轉見極力追新之妙。但其無精彩處。更要一段洗練。

其三大津

龍、珠、在、手、豈、相、提、不、意、帝、城、聞、鼓、聲。已、斷、蜀、江、千、丈、鎖。誰、封、函、谷、一、丸、泥。琵琶湖上日空落。三井寺邊鴉亂啼。莫向騷人談往事。好風景裏易悽悽。

湖海曰。弘文帝瀨田之事。古今同此一哭。作者熟精史事。有識有筆。宜其一聯用典。竟得名句。是不待贅嘆也。

短詩

北の花

あゝ君が忘れ形見の歌ありし星靜かなる豊平の水。
豊平の君をしのびて墓になく吾が瘦せ姿藻岩嵐吹く。
豊平の岸にたづみろの昔君がみ歌の星をたかみき。
花を手向け君がみはかにぬかづけばあわれはらはら榆の花散る。

夕闇に笛をきく、つ、野をゆけば榆の木かげにかけす鳥のなく。

藤 輪